

分野／取組	保健医療／医療
当時の所属・役職	県立尼崎総合医療センター 看護師長 (R2.4～R4.3)
現在の所属・役職	病院局管理課 職員班 主幹 (看護人材確保担当)
氏名	浅山 智美

1 主に担当した業務

私は兵庫県立尼崎総合医療センターの COVID-19 中等症病棟の看護師長として、感染拡大初期から約 1 年半の間、病棟環境や物品の整備・人員確保と教育を行いました。

中等症病棟は、もともと外科系混合病棟 41 床と感染症病棟 8 床を一体運用している病棟でした。感染拡大時には感染症病棟 8 床にプラスして、外科系混合病棟のうち 25 床を COVID-19 中等症病床へ転用し、患者さんの受入れを行いました。

尼崎総合医療センターの中等症病棟では、2020 年 3 月 1 日の兵庫県内 1 例目の COVID-19 患者さんの受入れ以後、1 年間で約 700 人の COVID-19 患者さんの看護を行いました。

当時、COVID-19 は誰にとっても未知の感染症で、看護師も自身の感染への不安を抱えながら患者さんを受入れなければならない状況でした。感染症病棟では、普段結核や播種性帯状疱疹といった感染症患者さんの看護を行っていましたが、COVID-19 のように重症化する呼吸器感染症の看護経験が少ないことにも不安がありました。

また、病棟には看護師だけではなく、コメディカルの職員や物品配送業者・リネン担当者・清掃担当者など様々な職種が勤務しています。私は看護師長として、まずは患者さんを守る。そして看護師を守る。病棟に関わる全ての職員を守る。という視点で業務の調整や物品の調達、マニュアル作成および看護師への指導などの管理業務を行いました。その際には院内感染対策チームと緊密に連携をとり、感染対応手順の作成、物品の調整や防護服の着脱訓練などへ協力してもらいました。

また、COVID-19 初期は感染流行の波がはっきりと分かれていましたので、感染者数が減っている時期に、看護師へのアンケート調査や面談などを行い、次の感染の波にどのように備えるか、部署一丸となって考える体制づくりも意識して行いました。

通常の看護環境とは大きく異なり、患者さんとの接触を極力控える状況での看

護に看護師のジレンマがありました。部署内でカンファレンスを何度も行い、隔離下でもできる最大限の看護を考えて実践することで、看護師のモチベーションを維持することができたと考えています。

2 印象的だったこと

私自身、看護師として衝撃を受けたのは、やはり COVID-19 患者さんのお看取りでした。初期の COVID-19 患者さんへの対応では、本来であればご家族に見守られながら旅立つべき場面なのに側にいるのは看護師だけ、お亡くなりになった後ですら、ご家族にお顔も見てもらえずそのまま火葬という状況がありました。病院の霊安室で看護師の手で患者さんを棺に納棺するという体験も初めてで、毎回手が震え、心が痛みました。

お看取りがあった日は、看護師の心理的負担の軽減のため部署の看護師全員で辛い気持ちを話す時間を持ちました。そして、「次はもっとより良い看護ができるよう、何か工夫できることはないか。」と、意見交換しました。看護師 1 人ひとり辛い思いがありましたが、看護師として患者さんに最善の看護を考え実践する。ということを繰り返すことで、乗り越えてこられたと思っています。

また、応援看護師の活躍も大変印象的でした。兵庫県立病院間では、加古川医療センターでの重症者専用病棟開設にあたって、各県立病院から応援看護師を派遣して、体制を整えることができました。尼崎総合医療センターでも、第 3 波以降は院内他部署からの応援看護師とともに看護にあたりました。県立病院として感染症流行に対応できる人員を即座に確保できる体制があったことと、応援看護師も強い使命感を持って感染症病棟へ異動してくれたことが、非常にありがたいと感じました。

3 うまく対応できたこと・反省点

うまく対応できたこととしては、1. でも述べましたが、感染の波が収束するごとに看護師へアンケートをとり、その都度部署目標や取り組み内容のブラッシュアップができた事です。明確な目標を定め、看護師に丁寧に説明し、それぞれの役割に応じて権限委譲を行ったことで、看護師個々が自律性を持って役割を遂行できるようになりました。その結果、感染症病棟の看護師としての役割意識が高まり、他部署でクラスターが発生した際には自分達で自発的に業務調整を行い、応援に行ってくれたこともありました。

また、不足する技術や知識を補うために、院内他部署への研修機会を活かし、ICU や地域連携室、精神科病棟などでの研修に自ら参加し、研修での学びを部署

内で発表することで看護師間での学びあいもできていました。

4 今後の新たな感染症への対応に活かしてもらいたいこと

新興感染症の流行はいつ何時おこるか分かりません。地域の安全を守る県立病院として、平時より感染症対応について自分事として捉え、継続した訓練や物品整備をしておくことは非常に重要だと考えます。

また、私は今回の管理業務の経験を通して、「どんな状況であっても、看護師は“患者にとって最善の看護ができた”と感ずること、やりがいを持って頑張り抜くことができる。」ということを感じることができました。COVID-19 対応と云えば、「医療者の疲弊」「感染の恐怖」「誹謗中傷」など、否定的なイメージで報道されることも多く、実際に辛い場面もたくさんありましたが、「隔離下だから、できない」ではなく「隔離下でも最大限のより良い看護を行う」という目標に向かって、病棟が結束できていたと自負しています。

部署の看護師長として、患者にとっての最善の看護を看護師とともに考え、それを実践できる環境づくりを全力で行うことが、大切な役割だと感じました。そして、辛い環境や事例ばかりを訴えるのではなく、頑張る看護師（その他の職種も同様ですが）の実践を承認し、取り組みを外に発信することも、モチベーションの維持に効果的でした。

5 その他

今振り返っても COVID-19 対応では部署看護師の「良い看護をしたい」という思いに私自身が支えられていたと感じています。

院内感染対策チームメンバーの他、COVID-19 対応とともに頑張ったすべての職種の皆様にもこの場を借りて感謝申し上げます。